

「かがみで遊ぼう」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

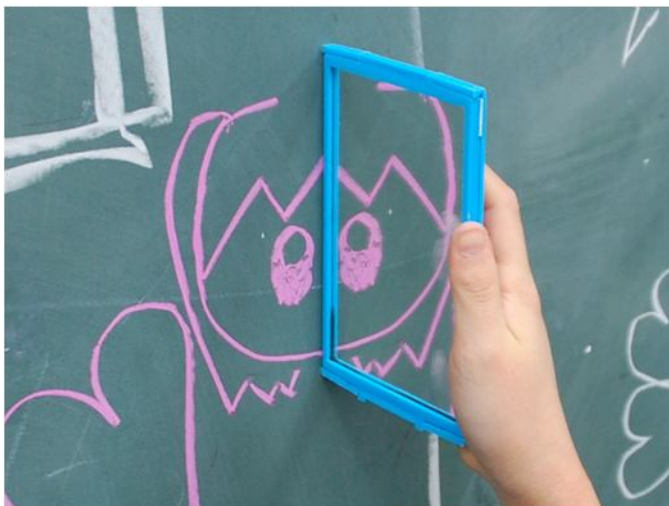
3年生の物理単元に、かがみと虫めがねで遊ぶ活動がある。どちらも子どもの生活には身近なもので、何となく性質も理解している。家庭や学校にあるかがみは、壁や洗面台に固定されている、ある程度の大きさがあるものが普通である。柄かがみはあまり見かけなくなった。意外にも小さなかがみというのは、子どもたちの遊びの中では使われていないものなのだ。

実際に理科の授業でスタンド付の小さな実験用のかがみを配布すると、それだけで興奮状態になってしまう。「まずはかがみを使って遊びを見つけてみましょう。」ともなれば、もう30分でも40分でも夢中になって遊んでいる。子どもたちが一番最初にするのは、黒板やノートに描いた絵をかがみに映す遊びだろう。

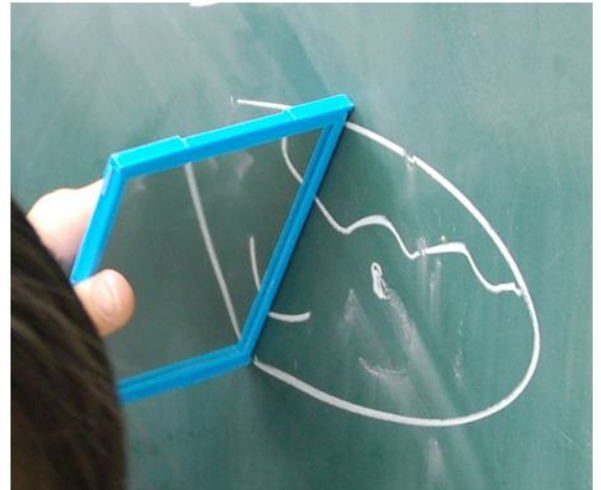
最初は普通に描いた絵を映してみる。そのうち、半分だけ描いておけば、線対称に絵が映ると気付く。もうそうになると「半分の絵らくがき大会」のスタートだ。この単純な光学現象が、子どもにとっては面白くて仕方がないのだ。



「半分絵だらけの黒板」



「ノートや黒板でかがみ遊び」落書きも楽しそう



そのうちある子どもが、かがみの角度を変えると、描いた顔の表情が変わることに気づく。ヒヨコの行列が、かがみにぶつかって2羽づつ消えてゆく・・・

「313」と書いて、左から右にかがみを動かすと、どんどん数が変わる・・・

かがみは、自分の姿も反転させて映す。しかし、子どもたちは、そのことをあまり意識していない。こうした「落書きかがみ遊び」をする中で、かがみは、ものを完全に反転させる性質があることを、実感したように思う。